

## 核時代・環境時代の森の力

核爆弾と人工衛星とが撒きちらす  
放射能の灰とラジオ光線の毒とに  
ありとある市 ありとある村の  
人間 家畜 栽培物が侵蝕される時  
森におこっているのは驚くべき  
生命の更新である。森の力は強まり  
ありとある市 ありとある村の  
衰弱は 逆に 森の回復である。  
放射能の灰とラジオ光線の毒こそは  
樹木の葉と地面の草と湿地の苔に  
吸収されて「力」になるからだ。  
樹木と草の葉が炭酸ガスに殺されず  
酸素を生むことを見よ  
核時代を生き延びようとする者は  
森の力に自己同一化すべく ありとある市  
ありとある村を逃れて 森に隠遁せよ！  
(大江健三郎著 「懐かしい年への手紙」  
1987年 講談社刊 17ページより引用)

ノーベル賞作家の大江健三郎氏は、1960年代からほとんどの主要作品において、神話的とも言える不可思議なエネルギーを持つ「森とそれに囲まれた谷間の村」を物語の場所としてこられた。文明批評の最も重要な論点として、早くから、核時代・環境時代における「森の力」を訴え続けてこられた。氏の慧眼に敬服しつつ引用させていただいた。

物語の世界から、現実にもどろう。核戦争は辛うじて食い止められているが、環境悪化はますます進んでいる。例えば地球温暖化問題。オゾン層の破壊問題。化学物質による大気汚染や土壌汚染等環境汚染の問題。森林の減少と大地の砂漠化の問題。水不足の問題。絶滅危惧種等生物多様性危機の問題。

わが国は国土の67%が森林という世界で1,2位を争う森林国である。気候温暖、山

紫水明の国である。豊かで優しい自然と、寛容な宗教は穏やかな2千年の歴史をわれわれに与えてくれた。世界でもめずらしい国だと思う。しかし、逆にそのことで我々は自然の恵みの豊かさ有難さに鈍感になっているような気もする。「もったいない」ことだと思う。

2004年に環境分野の活動家としてははじめてノーベル平和賞を受賞したケニア出身のワンガリ・マータイさんは2005年来日したおり、日本語の「もったいない」という言葉を知り感銘を受けたという。彼女の環境分野活動の中心が「植林運動」である。植林活動を通じて民主化や持続可能な開発の推進に取り組んでこられた。

わが国の森林・林業は、外国産材との競争に敗れ、林業経営は危機に瀕している。結果、1,000万haの人工林は手入れを放棄され荒れ果てている。京都議定書で約束した二酸化炭素削減目標数値の6割以上は森林の二酸化炭素吸収機能によるとされるにもかかわらず、肝心の森林の手入れは放棄されている。「もったいない」ことである。

このままでは自然破壊が進み洪水等の自然災害が頻発するだろう。現に水害や土砂崩れは増えているように思う。今一時の損得勘定だけから森林を見捨てていいものか。木を植える、森を手入れする、という文明論レベルでの「高貴な仕事」を放棄してもいいものか。

わが国の「もったいない」森林・林業をもう一度守る決意を固めるときに来ている。森林・林業・環境問題をどうするかはひとえに「文明」そのものにかかっている。

森を守る覚悟が今できるかどうか。森林・林業・環境危機は今や絶望的に巨大化している。我々に残された時間は少ない。

(秋山孝臣)